

# 乳幼児歯科保健に関する研究

分担研究者	井上直彦	東京大学分院歯科口腔外科
研究協力者	磯田厚子	女子栄養大学食生態学研究室
	伊藤学而	鹿児島大学矯正科
	井上昌一	鹿児島大学予防歯科
	岩本義史	広島大学予防歯科
	小椋 正	鹿児島大学小児歯科
	亀谷哲也	岩手医科大学矯正科
	金田一純子	国立小児病院歯科
	桑原未代子	大垣女子短期大学保健科
	幸地省子	東北大学第二口腔外科
	小林 臻	東京大学母子保健学科
	高木興氏	長崎大学予防歯科
	米満正美	東京医科歯科大学予防歯科

## ：研究目的：

研究の意義、目的については、すでに、母子保健システムの充実に関する研究班の昭和58年度研究報告書において述べた通りであるが、以下、その要約について記す。

本分担課題における基本的な姿勢は、歯科保健学の永年の努力にもかかわらず、子供の口腔の健康状態の本質的な改善が見られないことに対する反省を、どのように具体的な研究計画に反映させるかというところにある。この意味では次に示す4つのことがとくに重要である。

1. 口腔の健全性を損うものとして、従来は主としてう蝕のみを問題としてきた点を改め、そしゃく器官の発達を重視し、疾患に関しては歯周疾患、不正咬合、その他の疾患を含めて、口腔の総合的な健全性という視点を導入する。
2. 歯科疾患を口腔内の局所的な問題として処理するのではなく、身体と心に対する侵襲とのかかわりをも考慮に入れた治療と、全人格的な育成という立場からの健康教育とを展開する。
3. 乳幼児期の歯科疾患をこの時期だけの問題としてとらえず、この時期に存在する症候への対策はどの時期までさかのぼって行えば良いか、また、子供の口腔の将来に対してはこの時期にどのような布石

が必要であるかということを検討する。

4. 従来の歯科保健学が、専ら口の中の汚れを対象として展開されて来たことに対し、さらに重要な要素としてそしゃく器官の退化および発達の不全という問題をとり上げ、これに対処することを主軸とする新しい歯科保健の活動体系を確立する。これは、食生活指導によるそしゃく器官の発達を積極的に促進しようとするものであるが、このことによって歯の汚れの問題にも同時に効果があると考えられる。

このように、本分担課題は小児の口腔の健全性をとり戻すために、十分に広い視野に立って上記の諸問題を検討し、これによってわが国の乳幼児歯科保健の早急かつ具体的な改善を計ることを目的とするものである。

## ：研究計画：

### 1. 乳幼児歯科保健計画の再検討

本分担課題は、前項に述べた4つの問題点の考察に基づいて乳幼児歯科保健計画を再検討し、新たに、有効かつ具体的なプログラムを設定しようとするものである。研究のこの部分は班員全員が参加して行うものであり、分担課題の主たる部分といえることができる。その基本的立場は、すでに述べたように、従来の口の中の汚れを中心として考えられて来た乳幼児歯科保健のなかに、そしゃく器官の退化および

発達不全の概念を導入して保健活動の効果を高めようとするものである。

研究の内容としては、食生態の都市化の影響を、そしゃく器官の発達不全と口腔内の汚染との両面から把握すること、およびこの影響を最小限にとどめるための食生活指導の内容を整理し、これを母子保健指導と結びつけることが必要となる。このための実際の手順は次のように整理することができる。

#### (1) 乳幼児歯科疾患の実態調査

乳幼児の口腔について、う蝕以外の疾患の調査(健診)は現実にはあまり実行されず、利用可能な資料はほとんどない。本研究の基礎資料としては、咬合の発達と不正、口の汚れの程度、すべての歯科疾患、乳歯の咬耗などを含めたそしゃく器官の発達と疾患に関する実態を総合的にとらえることが必要である。

#### (2) 食生活の実態調査

そしゃく器官の発達と疾患とに対する食物の影響を知るためには、乳児期から幼児期にかけての授乳状況、離乳過程、摂食パターンなど、食物と食行動に関するデータが必要である。

#### (3) データ解析と保健計画試案の作成

そしゃく器官の発達および疾患と、食物および食行動との関係について解析し、現状における問題点を抽出し、乳幼児歯科保健活動の内容の再整備のための手がかりを探る。

#### (4) 保健活動の試行

このようにして得られた保健活動の内容にさらに最小限必要な予防処置と治療とを加えて総合的な乳幼児歯科保健活動計画の試案を作る。そして必要な修正を加えながら長期間継続して試行し、最も効果的な方法を確立する。

### 2. 各個研究

上に述べた乳幼児歯科保健計画の再検討ということが本分担課題の中心課題であるが、この外に、各班員が分担して行ういくつかのテーマがある。これらは中心課題を進めるための資料として必要な事項の調査や、新しくとり入れる事実や考え方の根拠を与えるための研究であって、いわばサテライト研究計画といえることができる。

#### (1) 保健関連機構の活用状況

乳幼児歯科保健計画の実用化のための基礎資料。

#### (2) 母子の性格とう蝕罹患について

保健行動の理解と健康教育の効率化の基礎資料。

#### (3) そしゃく機能量の測定

そしゃく機能量の測定法を開発し、そしゃく器官の発達不全と機能量の関係を一層明らかにする。

#### (4) 若年者顎関節症の実態

乳幼児期にさかのぼって対策をたてるための基礎資料。

#### (5) 障害児の歯科保健の実態

系統疾患保有小児および唇顎口蓋裂児に対する乳幼児歯科保健を検討するための基礎資料。

#### (6) 母子手帳記載事項の検討

本研究による知見を母子健康管理および母子健康教育に反映させるための検討。

#### (7) 人工授乳、摂食パターン、および低カルシウム食の影響に関する実験的研究

授乳形態、軟食、ならびに低カルシウム食のそしゃく器官の発達への影響を確認するための動物実験。

#### (8) 乳幼児歯科健診基準の確立

総合的な健診に必要な諸基準の整備。

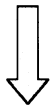
#### (9) 思春期および青年期の歯科疾患の実態

総合的乳幼児歯科保健計画の効果測定の対照資料。  
：研究経過：

前項に示した多岐にわたる研究計画は、その内容にしたがって進行状態もさまざまである。主題研究のように数年間の経過を追うことによって始めて信頼性のある結論に到達できるものもあり、また、基礎的な方法論の確立から始めなければならないものもあるからである。

乳幼児歯科保健計画の再検討に関しては、基礎資料としての歯科疾患と食生態の実態調査およびその解析はすでに昭和58年度に一応終了し、同年度の報告書において報告した。また、総合的な乳幼児歯科保健計画については、本年度に入って沖縄県宮古地方において、池間、狩俣両地区をモデル地区として試行を開始している。

各個研究に関しては、前項(1)から(6)までのものがすでに終了または中間報告の段階にあるので、今回、ここに報告する。その他については次年度に報告する予定である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



:研究目的:

研究の意義、目的については、すでに、母子保健システムの充実に関する研究班の昭和58年度研究報告書において述べた通りであるが、以下、その要約について記す。

本分担課題における基本的な姿勢は、歯科保健学の永年の努力にもかかわらず、子供の口腔の健康状態の本質的な改善が見られないことに対する反省を、どのように具体的な研究計画に反映させるかというところにある。この意味では次に示す4つのことがとくに重要である。

1. 口腔の健全性を損うものとして、従来は主としてう蝕のみを問題としてきた点を改め、そしゃく器官の発達を重視し、疾患に関しては歯周疾患、不正咬合、その他の疾患を含めて、口腔の総合的な健全性という視点を導入する。
2. 歯科疾患を口腔内の局所的な問題として処理するのではなく、身体と心に対する侵襲とのかかわりをも考慮に入れた治療と、全人格的な育成という立場からの健康教育とを展開する。
3. 乳幼児期の歯科疾患をこの時期だけの問題としてとらえず、この時期に存在する症候への対策はどの時期までさかのぼって行えば良いか、また、子供の口腔の将来に対してはこの時期にどのような布石が必要であるかということを検討する。
4. 従来の歯科保健学が、専ら口の中の汚れを対象として展開されて来たことに対し、さらに重要な要素としてそしゃく器官の退化および発達の不全という問題をとり上げ、これに対処することを主軸とする新しい歯科保健の活動体系を確立する。これは、食生活指導によるそしゃく器官の発達を積極的に促進しようとするものであるが、このことによって歯の汚れの問題にも同時に効果があると考えられる。

このように、本分担課題は小児の口腔の健全性をとり戻すために、十分に広い視野に立って上記の諸問題を検討し、これによってわが国の乳幼児歯科保健の早急かつ具体的な改善を計ることを目的とするものである。